

後援会「ともと歩む会」のお知らせ

暑い夏の到来です。皆様お元気にお過ごしでしょうか。ともと歩む会ではスポーツフェアや市民祭りなど年に3～4回、イベントに参加して、販売、啓蒙活動を行っています。

活動と一緒に参加して下さる仲間を募っています。活動を通じて親睦を深めてみませんか？どうぞお気軽に お問い合わせください。

「とも」を支えてくださる方々



社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス ともへのご寄付のお願い

社会福祉法人となっても、その財源は今までと何も変わらない現実です。皆様からの寄付は現在行っている社会福祉事業に役立らせていただきます。皆様のご協力をお願いいたします。なお、「とも」への寄付は、以下の税制上の優遇措置があります。

- ◆個人の方は、所得税に係る「寄付金控除の対象」になっています。
- ◆法人の場合は、一般の寄付金とは別枠で損金の額に算入することができます。
- ◆相続や遺贈によって受けた財産を寄付した場合は、その分は相続税の対象外となります。

寄付金振込先 京葉銀行 新浦安支店 普通口座 5429331
口座名義：社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも
理事長 大槻 優子

「ともと歩む会」申し込み方法

- ◆年会費は 3,000 円です。
 - ◆都合上、4月に更新とさせて頂いております。
 - ◆4月発行のとも通信に振込取扱票を同封させて頂いております。
- 口座番号・郵便振込先：00120-0-536557 / 名 義：中田光昭

発行：社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも
〒279-0022 千葉県浦安市今川1-14-52
＜編集後記＞
梅雨があけ、陽射しの眩し過ぎる、楽しい季節がやってきました。
夏バテや熱中症には気をつけて、暑さに負けず元気に過ごしていきましょう。 【S】

SSTK



社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも
〒279-0022 千葉県浦安市今川1-14-52
TEL: 047-304-8808 FAX: 047-304-8821
第40号
いっしょに生きる
楽しく生きる

カニは横に歩く



7月4日に基幹相談支援センター主催で行われた講演会『なぜ障がいのある人は闘わねばならなかったか？～当事者と障害者差別解消法～』に参加しました。(2ページに掲載)

当事者である Fさんと、彼に介護者として、後には取材者として関わってきたフリーライターの角岡さんが語る、障がいを持つ方たちが閉じ込められていた“自宅”から、“施設”から、彼ら先駆者達の言葉に尽くせない壮絶な闘いの末に、やっと手にしてきた「自立生活」(自己選択)や、差別との闘いがあることで、障害福祉の今があることを改めて振り返ることになりました。角岡さんが書かれた『カニは横に歩く(講談社刊)』に書かれている、世界女性会議(北京会議)で優生思想について問題提起をした安積遊歩さんは「とも」の理事を長い間努めてくださった方です。ほんとうは、「親は敵」だけど「貴方たちが(法人)やるなら理事になるよ」、と引き受けてくれました。CIL(自立生活センター)の中西さんも、浦安のなかで当事者ではない私たちが障がい者支援をすることを認めてくれました。まだ、措置の時代です。

その他にも自立する障がい当事者リーダーの方たちとの出会いがあり、交流があったことも、「とも」がいつも当事者主体に立とうとする時に『道しるべ』のような存在になっているのだと思います。

Fさんたちと同じその歴史の中で生きてきた障がい当事者の方たちの姿や思想を、少なからず「浦安共に歩む会」の時代から、じかに見聞きしてこれたことの貴重さを思いました。

障がい者にとって親はもちろん親ですが、最初の差別者であり、命を脅かす存在であり、自分自身の尊厳を認めてくれない人でもあったのです。その頃、運動の中心にいる遊歩さんたちに、私たちの在り方を理解してもらえたことは本当にうれしいことでした。親でも障がいがあるわが子を一人の子どもとして、障がいを

含めた『その存在』を認める、または認めようと思っている親も

いる。人の尊厳を考え続けることは、障がいのあるなしや、立場の差ではないことを彼女らは理解してくれていました。

時が流れ、闘わなければならなかった記憶が忘れ去られてしまわないように、私たちは過去を知り、伝えながら、前に進む役割があるように思います。

「カニは横に歩く」には親の子殺しの話、介護に入っている学生が、疲れから障がい者の首を絞めそうになる話。知的障害者が学校の池に落ちて死亡した事故で支払われた損害賠償が高額すぎるという議員に抗議を続ける話。寝たきりの重い障がい者が警察にすぐに排除されないように、針金で自分の首と机の脚を繋いで、身体を張って抗議した話…等々が出てきます。過激で驚く場面もたくさんありますが…。何より印象的なのは、無償の介護から現在のような有償のヘルパーに制度や環境が変わっていったとき、それぞれの立場の人たちに様々な葛藤や変化があり、その一方、今も変わらない障がい者と健常者の関係を築く難しさや人の意識に沈黙し続ける優生思想もあるということでした。

「誰もが抑圧されないで生きていく」。障がいを持つ人たちが教えてくれることがたくさんあります。

財源や制度、サービス類型や、親や支援者などの立場の枠組みを超えて、私たちは何を目指して何のために福祉の仕事をしているのか？をちゃんと考えていくことが求められています。ぜひ、ご利用されるご本人やそのご家族のみなさんとも一緒に考えていきたいと思えます。サービスに囲まれている今だから。障がい者の歴史、福祉の歴史を知ることとても大切なことだと、久しぶりに当事者の講演会に参加して思いました。

西田良枝

障害者差別解消法をテーマにした講演会を行いました！

7月4日、浦安市基幹相談支援センター主催で、差別解消法をテーマにした講演会「なぜ障がいのある人は闘わねばならなかったか～当事者と障害者差別解消法」を行いました。当事者、家族、地域の支援者等、予定の倍を超える100名以上の方々に参加いただきました。

今年4月に施行された「障害者差別解消法」を、これまであまり取り上げられなかった視点から考えたいとの思いで私たちは今回の講演会を企画しました。それは『当事者の視点』です。多くの困難、差別と闘いながら地域での暮らしを切り開いてきた当事者の方々からみて、これまでの闘いが現在の制度や条例にどのようなつながっているのか。今なお残る課題は何か。実体験から語っていただきましたからです。

そのためにお招きした講師が、第33回講談社ノンフィクション賞受賞作品『カニは横に歩く 自立障害者たちの半世紀』の著者、角岡伸彦さんと当事者の

F さんです。F さんは、1970 年代初めから現在に至るまで地域で一人暮らしをしています。角岡さんは大学生のときに障がい者介護に誘われ、F さんをはじめ様々な当事者の生活を十数年間、間近でみてきました。



講演会は角岡さん、F さんのトークセッション方式で行われ、ユーモアあふれるやりとりで会場は何度も笑いに包まれながらも、参加された

皆さんは真剣に聞き入っていました。終了後のアンケートでは、「嫌なことはいや」と言う「健全者に決められたくない」との F さんの思いに感銘を受けた、角岡さんと F さんとの信頼関係がうかがえた、との声が寄せられました。

講演会の最後、制度が充実しても存在し続ける問題として、(サービスの)利用者と提供者の『対等な、お互いに抑圧のない』関係が語られました。誰にとっても差別のない社会は、『とも』が目指す「誰もが自分らしく、地域とともに生きる」社会につながることであります。

障がいのある人もない人も、目の前の相手と『対等な関係』をつくっていくこと。これが社会を変える前進、変化の一步になるのではないかと教えられ励まされた講演会となりました。よい学びの機会を提供してくださった講師の角岡さん、F さんをはじめ、参加された皆さん、関係者の皆さん、どうもありがとうございました。



パーソナル・アシスタンスとも 日中一時支援事業所

～新規プログラムの開始と預かり事業の充実～

パーソナル・アシスタンスとも日中一時支援事業所は、今まで療育的視点を持った事業内容に焦点をあてて行ってまいりました。

平成 28 年 7 月からは新たに 2 つのサービスを加え、事業内容を更に充実したものに改めました。

ひとつ目は、就労されている方の休日やアフターファイブ、中・高校生の放課後に焦点をあてた“倶楽部活動”を始めました。

同じ趣味を持つ仲間たちと、みんなで好きなことについて調べたり、話をしたりしてリラックスした時間を過ごせる場所。療育とはちょっと違ったアプローチは、好きな事を通して友人も増えたりと、ご本人たちの世界も広がるのではないのでしょうか？

学校や職場で頑張ってきたあとだからこそ、好きなことをする時間を持つのも大切なことだと考えました。

好きな方が多いのではと思って選んだのは、“てつどう倶楽部”、“生き物倶楽部”、“アイドル倶楽部”、“パソコン倶楽部”の 4 つです。興味のある方はぜひお

問合せください。

そして、ふたつ目は保護者の方々のご要望も多かった、預かりのみの事業です。

ご利用になりたい時間でご予約を承りますので、ご活用ください。送迎については可能な限りお受けしますが、実際にご希望の時間にお受けできるかどうかは予約時に確認ください。

日中一時支援事業所は、昨年 10 月に今川のマリナーティスティに場所を移し、新たな一歩をふみだしました。ぜひ、みなさんのご利用をお待ちしています！！



地域福祉と私

“地域で共に暮らす” 私は「社会福祉法人パーソナル・アシスタンスとも」のホームページでこの言葉を見つけたことがきっかけとなり、「とも」で働きたいと思うようになりました。福祉の世界で働くことを目指したきっかけが、まさに、「とも」の理念にあったのです。

私は「とも」で働き始めるまで、住み慣れた地域で障がいを持っている人が暮らしていく事はとてもハードルの高い事なのではないかと思っていました。

田舎育ちで、周りには障がいを持っている人が働く場所や通う場所がなく、高校生になると遠くの学校に通い、そのために施設に入所しなければならない現実を見て育ってきたからだと思います。また、今でこそ『地域福祉』と言われていますが、当時は施設入所が主流だったということもあります。そのことにずっと違和感を感じ、「なぜ一緒にいられないのか？」という事を私はいつも心の中で感じていました。みんな一緒に地域で暮らしていくためには何が必要なのか、私には何が出来るのか、その答えを見つけないという思いが、私が福祉の世界で働く

ことを目指した原点にあります。

そして、「とも」で働き始め 5 年目。利用者さんが地域で暮らしていく事を支援させてもらいながら、今もまだ答えを追っているところです。ただ以前とは違い、答えはいつまで経っても追いつけなければいけないものだという風に今は思うようになりました。それぞれ違った人生があり、答えは一つではなく、時には変化していくものだという事がわかったからです。ハードルは決して高くない、低くしていくのは私たち自身なんだと今は思っています。一人では実現できないことも、沢山の人が集まれば実

現の幅は広がります。そして、色々な人と一緒に考え行動する事こそ、将来の地域福祉に繋がっているのではないかと思います。

私の答え探しはこれからも続きます。「私には何が出来るんだろう？」という事を、心の中で常に問いながら、これからも「とも」の職員として支援をしていきたいと思っています。



T.M